保育者の保育性に関する研究
—保育者と小学校教諭の語りの分析より—

佐　藤　智　恵

A Study about "Childcaring-ness" of Childcare Person:
Analysis of the Talk of Childcare Person and Elementary School Teacher

Chie SATO

要　旨

本研究では、保育者特有のものの捉え方や考え方を「保育性」と定義をし、保幼小連携という視点からみた保育者と小学校教諭の間の意識の差異から保育性を描き出すことを目的として研究を行った。方法としては、保育者と小学校教諭にインタビューを実施しその語りを分析した。その結果、3点の差異が描き出された。1つ目として、保育者はその職業を選択する上で職業イメージを変容させる「きっかけ」があると考えられた。次に、保育者からは幼児の小学校入学後について言及がなされた。3点目として、保育者はチームで保育をするという意識が強く、ある程度の経験を積むまでは「一人前」として扱ってもらえないと捉えていることがうかがえた。これらのことから、まず「保育性」の背景となるものとして、「職業イメージの変容」の存在が挙げられる。「保育性」としては、1点目として「他者からの評価への意識」、2点目として「育てる風土」が挙げられる。保育者は実践上の感覚として周囲からの自らの評価を敏感に感じ取っており、保育には経験の少ないものを「育てていく」という職場風土が存在するのかもしれない。

キーワード：保育性、語り、質的分析

Ⅰ．問題と目的

現在、我が国における小学校就学前後の保育・教育をめぐる問題に「保幼小連携」が挙げられる。平成21年改正の「保育所保育指針」、「幼稚園教育要領」、「小学校学習指導要領」においても、保幼小での連携を図り、それぞれの保育や教育に対し情報交換し、相互理解を行うことの重要性が明記された。乳幼児期を基盤とした発達と学びが、小学校就学後も連続したものになるように、「保幼小連携」が重要な課題だとされている（文部科学省、2008；厚生労働省、2008）。

このように連携が重要視されるようになった背景の一つに、「小一プロブレム」といわれる現象がある。これについての予防の取り組みとして「保幼小間での交流」や「保育者・教員間の情報交換」などが挙げられている（東京都教育委員会、2010）。また、幼小間での人事交流などが行われている地域もあり、幼稚園・小学校双方で教師の経験をすることの意義も報告されている（塩原、2010）。しかし、このような連携を行うためには、様々な条件が整わなければならず、地域によっては、それぞれの施設の立地条件などで連携が困難な場合も考えられる。一方、「小一プロブレム」は保育所幼稚園と小学校における保育・教育方法やそれぞれの保育・教育に対する意識に大きな差があるために生起した問題であるという指摘もな

されている（寺﨑、2010；山田・大伴、2010；塩原、2010 ）。寺﨑（2010）は、就学前と小学校での生活を比較し、「大人と子どもの関係のあり方」という視点を見い出し、２つには大きな差異があることを指摘している。また、山田・大伴（2010）は、幼稚園年長児を担任する保育者187名と小学校１年生を担任する小学校教諭135名に対して、質問紙による調査を行った結果、保育者は「集団生活の中で自立的に行動することに注目する」傾向が、小学校教諭には「１対１で関わる必要のある姿に注目する」傾向があることを報告している。このように、保育者、小学校教諭それぞれの意識には、差異があることが明らかにされている。量的な調査ではこのようなことが明らかになってきている一方、質的な方法によりそれらを検討しようとするものもある。塩原（2010）は、幼小連携について人事交流の視点から検討を行い、人事交流経験者のインタビューや授業の参与観察から、交流を経験することでそれぞれの教育・保育のスタイルが変化することを報告し、人事交流活動の意義について述べた。しかし、このような人事交流は立地条件や地域の事情などによっては実施が困難な場合もあると思われる。

佐藤（2011）は、保育者特有のものの捉え方や考え方を「保育性」と定義をし、保育日誌を自己エスノグラフィーにより分析を行なった。その結果、1)専門性への迷い、2)無意識下の気づき、3)自己の保育への意味づけという３つの「保育性」が描き出された。「保幼小連携」を考える際、それぞれの職業の特有の保育や教育の捉え方についての差異を明らかにすることで、連携にあたっての手掛かりを得られるものになるのではないだろうか。

そこで本研究では、保育者と小学校教諭にインタビューを実施し、それぞれの保育や教育の捉えから、保育者と小学校教諭の意識にどのような差異があるのかを描き出すことを目的として研究を行う。

Ⅱ．方法

小学校教諭と保育士、幼稚園教諭の３名に対して、半構造的なインタビューを実施した。

対象者は、Ａさん（小学校教諭）、Ｂさん（保育士）、Ｃさん（幼稚園教諭）の３名である。2011年９月と10月に一人ずつインタビューを行った。インタビューは、対象者の自宅など、対象者の希望の場所で実施し、時間はそれぞれ１時間から２時間程度であった。インタビューを採録したものを全て書き起こし、その後、教育や保育の捉え方に関連すると思われる箇所に下線をつけ、その前後の発言についても分析を行った。

(1) 対象者の経歴など

1) Ａさん　女性　Ｘ市立小学校教諭。教師になって７年目である。大学卒業後４年間は臨時教員として勤めた。うち、２年目までは産休や病欠教員の代替として２～３か月ずつ次々とクラス担任を持った。正規採用になってからは小学２年生、３年生を担任し、現在は小学３年生を担任している。

2) Ｂさん　女性　私立保育園に勤務する保育士。４年制大学を卒業後、現在勤務する保育園に就職し、現在８年目である。０歳児クラスから５歳児クラスまで全てのクラスを１回ずつ担任した経験があり、現在は２度目の年長児クラスの担任である。

3) Ｃさん　女性　私立幼稚園に勤務する幼稚園教諭。４年制大学を卒業後、現在勤務する幼稚園に就職した。現在10年目で、４歳児クラスを担任している。

Ⅲ．結果と考察

３名のインタビュー内容は、(1)職業に就いた理由、(2)教育・保育を行う中で大切にしていること、(3)クラス運営・同僚について、の３つのカテゴリーに分けられた。

(1) 教諭・保育士になった理由

Ａさん（小学校教諭）

> いつぐらいに…中学校の時にはもう思っていたかな。(1)漠然と先生という職業に憧れて

いたわけではなく、特定の「あの先生」みたいになりたいなと思っていた。小学校から中学校までかかわってもらった先生のことがずっと好きだったんかな…。人間味のある先生が担任してくれたっていうか…。（略）　先生の話を聞こうと思って窓ガラスに耳つけてて聞いてて、窓ガラス割ってしまったり…好きな先生を待ち伏せしてカニばさみしてみたりして…ハハハ。すごい子どもですよね。今考えたら。(2)でも、その時にも先生たちは、嫌な顔もせずに毎日受け入れてくれてて。それで突き放されてたら、きっとヨレってなってたかも…。すごい真面目でもないし、言うことキカンっていう子でもないけど、なんか変ってるけど、学校が好きっていうか…そういう子どもだったと思う。

Ｂさん（保育士）

保育士になろうと思ったのは、(3)小さい時から「先生」になりたいな…と漠然とは思ってたかな…。（略）　近所に保育園があって、その前を通る時に先生たちの保育を目にすることがあったんですね。(4)小さい時は「憧れ」の部分だけで「幼稚園ごっこ、保育園ごっこ」みたいな「かわいいい世界」って感じで保育士を見てたんだけど、高校生くらいになって、たまたまゆっくり保育園の様子見ることがあって、奥深いって思った。優しくしてるのはもちろんなんですけど、ケンカしてる子ども２人に、叱るのじゃなくて、子どもの言い分聞いたりして、諭すっていうか。結構大きな子に話すように、３人で話し合いしてたんですよね。(5)私、そのころ、幼児ってなんにも分からない、守ってあげる対象っていうような印象だったんですけど、違うんですね。それで、いよいよビックリっていうか、が～んっていうか。まぁそんなことがきっかけで、「先生」って言っても学校の先生じゃなくて、小さい子と過ごす保育士とか幼稚園の先生が目標になりました。

Ｃさん（幼稚園教諭）

幼稚園教諭になろうと思ったのは…大学になってからです。なんになりたいというのではなく、（略）　なんか大学受験が上手くいかなくて…。(6)で、浪人せずに進学できるとこ、というのでＸ大学に行きました。それで…ホントはダメだなぁって思うんですけど、たまたま行ったところが、小学校の先生とか幼稚園の先生、保育士資格が取れる学科だったっていう…。進んだというか、「行ったら資格とるとこだった」という感じかな…ハハ…まずいねこれ。でも、子どもは好きだったかも。小さい子どもは好きでした。それも影響してたかな…。それで、(7)大学の勉強が始まっても、初めのうちはそんなに意識が高くないっていう感じで。他の友達はみんな「絶対学校の先生になりたい」とか「絶対幼稚園に就職する」とか言ってて。(8)「あら～。まずい」って感じでした、正直。で、割と目的もなく大学に行ってたんですけど、幼稚園系の科目の授業がたくさん始まると、「あ、なんか面白い！」って思い始めて。(9)なんとなくイメージ的に「は～い、今日はこれやりますよ」とかいう、よくテレビドラマなんかでみる幼稚園の先生っていう姿あるでしょ？ああいうのを想像してたんですね。で、子どもも全員が片手上げて「は～い！」とかいう場面ね。ありますでしょ。でも授業の中で先生が「あれは幼児教育とは違います。幼稚園や保育園であんなことやってたら勤まりません。子どもはそんなに単純でも素直でもないです」って。もう「え～！そうなの？」ってびっくりでした。それまで幼稚園とか自分のかすかな記憶しかないし…。それで、幼稚園に興味を持ちました。

その職業に就いた動機として、ＡさんとＢさん

は、理由は異なるが幼小の頃からそれぞれの職業を選択していた【下線(1)、(3)】。Aさんは中学時代に関わった教員の影響が大きかったと述べ【下線(2)】、Bさんは偶然目にした保育士の姿によって保育というものを理解したことがきっかけであったと述べられた【下線(5)】。一方、積極的な理由により職業選択を行っていたAさん・Bさんと異なり、Cさんは大学受験の失敗により仕方なくその道へ進んだことが語られた【下線(6)、(7)】。大学進学後すぐは、志望動機のしっかりとした友人のモチベーションと自らのそれを比較していたようである【下線(8)】。また、幼児教育や保育については、テレビドラマなどから得たイメージで捉えていた様子であったが、ある講義での教員の言葉から幼児教育に関心を持ち始めたということであった【下線(9)】。また、Bさんからは「憧れ」や「かわいい世界」という言葉で保育園のイメージが語られた【下線(3)、(4)】。BさんやCさんが元々もっていたものは、幼児教育・保育への一般的なイメージであろう。しかし、保育実践に触れたり学んだりする中で、実際の幼児教育や保育というものがそのようなものではないことを知った様子であり、それがBさんやCさんの幼児教育や保育への関心を高めるきっかけとなった事がうかがえる。

(2) 教育・保育を行う上で大切にしていること

Aさん

> (10)担任の子全員に寄り添うっていうか、一人ひとりの事を分かってあげるのが大事なんやなって思うけど、なかなか…表面的な部分にとどまってしまう子もいるし、もちろん深く聞ける子もいるし。その辺が難しいけど、大事か…な。(11)でもそればっかりではだめで、勉強の面とか力をつけてあげなアカンけど…。でもそれも個人差があって、そこでも寄り添っていきたいなと思うけど。自分の中では勉強よりも、気持の面でのフォローというか気持ちを見ていく面の方がウェイトが高いです。

Bさん

> (12)子どもには、心の面でも成長してほしいし、いろんな面で色々経験させたいと思います。(13)それは、「出来る」とか「出来ない」が問題ではなくて、「出来たから嬉しい」とか「出来ないから悔しい、また挑戦したい」とかそういうような気持ちって大事でしょ。そういう気持ちをしっかり経験させときたいです。(14)そういうことって幼児期に経験していかないと、学校上がってからだとシンドイんじゃないかな。そんな気持ちが少ないとね。(15)あと、保育で大事にしていることは、う～ん。難しい。なんだろ。大事にしてること…あるんですけどね。なんかこういう風に言うとなると言えない…。……(16)「一人ひとりを大事に」とか言うべきかな？ハハハ。そうなんですけどね。もちろん。一人ひとりを大事にしないといけないですよね。でも、それかって言われると…違うかな。なんか、これって言えないなぁ。スミマセン。あ、でもそうかな。「一人ひとりを…」っていうと、なんかぴんと来ないけど、私は子どもの話を聞くようにしてます。それってそういうことですよね。たとえ1歳児クラスの担任でも、子どもの話は聞きます。(17)言い分がありますよ、1歳児にもね。面白いです。目や表情で主張しますからね、彼らは。ホント。こっちが理解できないと、「先生、なんで分からんのじゃ！」って怒られますよ。「ごめんね～」ですよね。(18)10人いたらい10人、20人いたら20人、子どもは全く違うから、その部分を知るのは大事にしたいと思ってます。

Cさん

> (19)一人ひとりの子どもとしっかり関わることを保育をしている中で大事にしたいなぁって思ってます。(略) さっき、若い時には「クラスまとめないと」って思ってたって言

いましたけど、今はそれはあんまり思わない。まとめるっていうより、⑳「こういう風になってほしいなぁ」っていう見通しっていうか、何ヶ月後の姿をそれぞれの子に持ちながら、毎日保育していると、知らないうちにクラスがまとまっていってるっていう気がしています。あとは、㉑小学校に行った時に困らないようにっていう気持ちもあります。今、年長クラスなんで。そうなると「せめて30分位は持続して話が聞けてほしいなぁ」とか「こういう経験はさせておこう」とかいう気持ちはあります。㉒文字は書けなくてもいいっていうか、小学校の方からも別段言われないですし。でも興味は持たせたいって思います。興味持ってたら違うと思うんです。まぁ今は保護者が熱心なので、全く興味ナシっていう子はいないかな。その辺、なんか毎回出たとこ勝負っていうか、特にこういう風に文字を教えるって進めていくなんていうのもないしね。でも、やっぱり㉓学校行った時に「幼稚園で何してたんよ」って思われないようにしないと…っていう気持ちはありますね。そんなこと思われないのかな。でも、子どものため…もそうですし…自分のため…園のためもあるかな。いい園って思ってもらいたいです。

保育や教育の中で大事にしていることについては、「一人ひとりを」という言葉が3名全員から語られた【下線⑩、⑯、⑲】。このことから、保育や教育の社会の中で「一人ひとりを大事に関わる」ということが当然のものとして受け止められていることがうかがえる。しかし、その語られ方は少し異なり、Aさん、Cさんからは即座に「一人ひとりを大事にしたり、関わったり」をという言葉が肯定的に語られたが、保育士のBさんは「一人ひとりを大事に」という言葉を使用することに対して、多少の戸惑いや違和感を感じている様子であった【下線⑯】。しかし、その後、別の言葉【下線⑱】からは、Bさんもまた個々との関わりを重要視していることがうかがえることから、Bさんは、保育という社会の中で、「一人ひとりを」という言葉が一人歩きをしているような感覚を持っているのではないかということが考えられる。どの職業社会でも、その状態を表現するために使用される専門用語といえるような言葉があると思われる。それは保育や教育の世界でも同様に、子どもの様子、教師や保育者の関わりなどを表現する際に使用される共通した言葉がある。しかし、それは、ともすれば安易な言葉の選択にもつながる事が考えられ、子どもの様子や教師や保育者の願いや心情を的確に表現するものではないということもあるだろう。Bさんの戸惑いは、このような状態を感じたことから生起したものかもしれない。

保育士Bさん・幼稚園教諭Cさんともに、担任幼児の小学校入学後の事を気にかけていることが語られた。2名とも「幼児期に身につけておくべきことがある」と考えており、それはスキルの獲得ではなく、意欲を身につけることであった【下線⑬、⑭、㉒】。同様に小学校教諭のAさんからも、勉強面での力をつけることの必要性を感じながらも、子どもの気持ちが重要だと考えている発言が見られた【下線⑪】。学力や高いスキルよりも意欲を持つことが重要視されるのは、意欲が見られない幼児・児童への対応の難しさをそれぞれが感じている事が考えられる。

幼稚園教諭のCさんからは、見通しをもった保育を行っているということ【下線⑳】、また、小学校入学後の子どものことが述べられた【下線㉑】。Cさんは、入学後の子どもの姿がその子自身の評価となるだけでなく、自分の保育や勤務園の保育方針などの評価にまで及ぶと考えているようであった【下線㉓】。実際にそのような評価を受けているということではないようだが、子どもを送り出す側の幼稚園の心情としては、子どもの評価が全て自分たちへの評価になる、というような気持ちを持つのかもしれない。ここからは、幼稚園と小学校が対等な立場ではなく、小学校が幼稚園での教育を評価する立場、幼稚園が評価され

る側である、という幼稚園教諭Ｃさんの意識が読み取れる。

(3) クラス運営・同僚との関係について

Ａさん

(23)自分のクラスが自分の城っていう感じもあるけど、他の人からいろいろ言われることもあるしね。子どもの態度とか、生活面でね。アドバイスっていうより…子どもが悪いことしたりすると、担任のせいっていうか、まぁせいではないけど。そういう雰囲気が、こうサ～っと流れるという…。でも、やっぱりクラスによって抱えている子の実態も違うし、ねぇ。(24)逆に、「教える」ことに関しては、（先輩教員から）なかなか指導されることはない。教科の事は指導がはいらないっていうか、全く言われることがないんですけどね…。好きにできる。見られることもあんまりないですし。（略） 初めは教科を教えることよりもクラス運営の進め方に悩みがあったんやけど、だんだんと教科の方、(25)教えることにも悩みが出てきているかな、最近。一年目は短期間だったからもう勢いっていうか、力技みたいに済んでしまったので、逆に悩みとかなく、ただただ一生懸命でしたけど。今は、両方とも悩んでる状態です…ハハハ…ダメですよね。授業を楽しくしたいけどできない、みんなに分からせたいけど出来ない、準備もこまめにしたいけど間に合わせの授業をしてしまう時もあるし…ほんまあかんよね。

Ｂさん

先輩からは色々とアドバイスをもらってます。でも、やっと去年くらいから「相談」っていうか、こちらが尋ねるだけじゃなくって、(26)先輩の方から「Ｂ先生、この件どう思う？」っていう風に聞いてもらえる事も出てきて、一人前に扱ってもらってるのかなって気がします。それまではこっちがただただ、「これどう思います。教えて、教えて」って感じでしたよ。でも、(27)それが今は先輩からも意見を求められるようになって、職員会でも「いるだけ」じゃなくて議論に入れるようになってきました。難しいですよね。若い時に意見がないわけじゃないけど、言いにくいっていう雰囲気がありまして…言ってると「生意気」っていうか「ま、先生はまだ保育のことよく分かってないしね…」っていうような雰囲気の事言われたりして。私立だから余計になんでしょうか。公立に勤めてる友人は、異動があるからかな、職員間は年齢間の上下ってそんなにないって言ってましたけど、私の園はありますよ。いい意味で上下関係厳しいです。(28)色々言われることもあるけど、私のこと考えて言ってもらってるんだっていう信頼関係あるしね。私も、後輩には色々言います。厳しいことも。でも、自分が厳しいこと言ってるから、自分もきちんとしないといけないっていうことにもなりますしね。割と人の保育に口出すっていう雰囲気です。やっぱり(29)保育ってチームでやるもんだし、考え方が違うと出来ないですよ。考え方が違うことはあっても、話をして、どういう風に保育するんだって言う方向性を決めないと。だって、今年のクラスだけってわけに行かないでしょ。子どもは今年だけ保育するんじゃないし、長い子どもは、園でずっと６年間過ごすわけですからね。やっぱりある程度統一感持たせた考え方にしないと。もちろん、やり方はそれぞれですよ。でも根本的な姿勢は統一したいなって思います。あ、もしかして、(30)これは、園の考え方なんかな、私、染まってますね。

Ｃさん

でも、新任の頃はすごかったですよ、ホントに。もうぐちゃぐちゃ。落ち込む以前の問題でしたね。私は副担任でクラスをもたせて

もらったので、(31)それほど重圧はなかったんだけど。あ、クラスをまとめていこうっていう重圧です。でもやっぱり「今日もダメだった」「またできんかった」っていう毎日。でも落ち込む事も出来ない状態、疲れすぎで！次の日の準備して、家に戻って来て夕飯食べたら、もうそのまま寝てしまうっていう毎日でした。そのあと、(32)2年目からは一人でクラスをもたせてもらったんですね。嬉しかったです。「できる！」って思ってもらってるんだって感じましたからね。ところが、まぁ大変でした。なんか「クラスをまとめないと～」って思っちゃって、子どもに「あれしてこれして」っていうことでまとめよう、まとまるんだって思ってたかな、今思うと。で、主任先生が窓ガラスの向こうから私の保育を見てるんですよ。もう「あ、見てる！」って思うと「キャ～見ないで！」って思った。だって、クラス、ガチャガチャですよ。それで、見てる時に限ってグチャグチャなんですよね。元々、(33)あんまり教えるっていうか全体に何か話したりっていうがあんまり得意じゃなかったのもあるし、「みなさん聞いてくださ～い」というのよりも個別にグッと関わって活動を展開してくっていう方法を面白いって思ってたのも関係あるか…な…。でも、(34)主任先生が「クラス全体に声かけする時はね…」とかポイントをたくさん教えてくれたんです。結構厳しく「先生のここダメ！」って指摘されるけど、必ず対応のヒントをくれました。ありがたかったです。

この項目では、保育士・幼稚園教諭と小学校教諭とでは語りの内容が異なるものとなった。保育士Bさんと幼稚園教諭Cさんは、自らの保育実践について先輩保育者から厳しくアドバイスを受け、そのことを保育者自身もありがたく感じ、それを受け入れている様子である【下線(28)、(29)、(34)】。ただし、Cさんの【下線(28)】の発言からは、「色々言われる」ことを多少面倒だと感じていることも読み取れる。しかし、先輩保育者との信頼関係がある程度出来上がっていると本人が感じている段階でのアドバイスであることと、【下線(30)】に見られるような、園への帰属意識とも言えるような感覚を持っていることで、アドバイスを受け入れやすくなっているのかもしれない。私立保育園で働くBさんは、大学卒業後すぐに現在の園に就職している。公立園のような職場間の異動がないことから、職員間の付き合いも長く、園の職員数も25名程度の中規模園であり、Bさん自身が、勤務園に家族的な雰囲気を感じていると考えられる。ところが、Aさんは教えるということについてそのようなアドバイスを受けることはなく、むしろ悪いことが起こった場合、「担任のせい」という雰囲気が流れるということであった【下線(23)、(24)】。このことからは、BさんやCさんの勤務園では、保育はチームで行うために共通認識が必要だという考え方があることから、アドバイスが日常的に比較的行われやすいと言えるだろう。

Aさんの勤務校では、先輩からのアドバイスが上手く得られないということであった。Aさんにとっては先輩の助言は「いろいろ言われる」ことで自らのクラス運営などを批判される、少しややこしいものだと捉えられているようだ。しかし、アドバイスが得られないことで「教えることに悩みが出てきている【下線(25)】」ということではあるが、それは言い換えれば、「自分のクラスは自分の城【下線(23)】」という言葉からも分かるように教員同士がある程度独立した関係であり、経験年数の多小がそれほど関係せずに、自分のやり方で教育を行える環境ということも言えると考えられる。また、Aさんは同年代のBさんと比較しても、しっかりした落ち着いた口調であり、性格的な部分もあるとは思われるが、このことからは「自らがしっかりとした考えを持たないといけない」という教師としての責務を感じているのかもしれない。

また、Bさん、Cさんともに、保育を任されたり、保育の相談を先輩から持ちかけられることで、自分の保育者としての技量を認めてもらえて

いると認識をしている様子である【下線(26)、(27)、(32)】。Ｂさんの発言からは、「先輩保育者から相談をされたことで、やっと一人前として扱ってもらった」という捉えをしていることが考えられ、そうなるまでにはある程度の年数が必要だと考えていることが推測される。Ｂさんが信頼を得たと感じたのは７年目のことであり、これは、高濱（2001）によって、保育者は５年以上の経験を積むことで、ある一定量の知識の蓄積のもと保育をしていることが報告されているが、Ｂさんの発言からも同様のことがうかがえる。

Ａさん、Ｃさんからは、新任時代の無我夢中な中での苦労が語られた【下線(25)、(31)】。しかし、その内容は少し異なり、Ａさんにとっては、７年目の現在の方が大きな悩みを持っているために、大変ではあるが毎日を一生懸命にやっていた１年目は「悩みがなくよかった時代」と捉えられている。一方、Ｃさんにとっては、１年目は本当に大変で、副担任であったために「重圧もなく」保育をしているにもかかわらず、毎日の保育実践についていくだけで必死だった様子がうかがえる。その後の２年目にも保育方法を模索している様子が【下線(33)】で語られたが、現在はある程度落ち着いた様子であった。このことは、前述の先輩からのアドバイスのことも関連すると思われるが、保育者は勤務年数が短いものが多い（文部科学省平成16年「教員異動調査」注)）ことから、職員集団の中、短期間で「仕事ができる人」になるように育てられているのではないかと思われる。

Ⅳ．総合考察

保育士・幼稚園教諭・小学校教諭にそれぞれインタビューを行い、その分析を行なった。保育士・幼稚園教諭であるＢさん・Ｃさんの語りと小学校教諭であるＡさんの語りから描き出された差異は、以下の３点であった。

１つ目として、インタビュー対象者には、それぞれ３名とも保育士・幼稚園教諭・小学校教諭になろうと思うきっかけとなる個人的な出来事があったことが語られた。比較的、よく知られた職業であり、イメージしやすいために、幼小時にこれらの職業への憧れを持つものは多いと思われる。しかし、保育者に関しては、職業イメージが先行しており、実際の職務とはギャップがあったようだ。保育者にとっては、多かれ少なかれこのような「きっかけ」があることが考えられる。

次に、幼稚園教諭・保育士からは幼児の小学校入学後について言及がなされた。保育者にとっては、小学校での教育を「自らが行う保育実践の延長線上」として捉えられているのかもしれない。それとともに、連携というものが保育所幼稚園からの一方向的なものになっている可能性が示唆された。今後、この意識の違いが「保幼小連携」を行うにあたってのヒントになることが考えられるだろう。

３点目として、保育所幼稚園では、チームで保育をするという意識が強く、ある程度の経験を積むまでは「一人前」として扱ってもらえないことが考えられる。一方、小学校では経験年数が少なくても「教える」ということについて「指導されること」はなく、それぞれ独立した「教員」として扱われていることがうかがえた。このことは、職業人としての成長過程にも影響を与えるものかもしれない。

これらのことから、まず「保育性」の背景となるものとして、「職業イメージの変容」の存在が挙げられる。保育者は社会のもつ保育者の職業イメージを自己の中で変容させることで、保育者になっていくことが考えられる。このような変容の生起は保育者の職業アイデンティティ確立の１つの側面を担っていると思われる。「保育性」としては、１点目として「他者からの評価への意識」が挙げられる。それは、保幼小連携においては「小学校からの評価」、園内においては「上司、同僚からの評価」であるだろう。保育者はそれらの評価を口頭で告げられることもあったようだが、その多くは実践上の感覚として周囲からの自らの評価を敏感に感じ取っていると考えられる。周囲からの評価は自らを苦しめるものとなる一方で、「やりがい」や「喜び」を感じるものとなっているよ

うだ。２点目として「育てる風土」が挙げられる。保育者の語りからは、先輩保育者から時に厳しく指導を受けていたことがうかがえる。そして、そのことに対して指導を受けた保育者自身は好意的な印象を持っている様子であった。これは、チームで仕事をするという保育職の特性が反映しているかもしれない。保育者自らも努力し経験を積む中で「保育者」になっていくのだが、経験の少ないものを周囲で「育てていく」という職場風土が保育には存在するのかもしれない。

本研究では対象者が各職種１名ずつと少なく、その職業の全てを表わすものとは言えない。しかし、個人の意識や考え方を聞くことでしか描き出せないものがあると思われ、それを蓄積させていくことで、明らかになる事象があると思われる。また、インタビューにおいて、何か言いたいことがあるのだけれどそれを言語化出来ない様子がうかがえた【下線⒂、⒃】。その一方で、堰を切ったように生き生きと話される場面もあり【下線⒄、⒅】、自らの言葉として語られていることが考えられた。言いたいことがあるにもかかわらず、すぐには言語化が困難であったＢさんは自身の実践を具体的にふり返りながら語る事で、「あるけれど言えない」という状態から変容していった。このことについては、職種の差というよりは個人の性格等がその要因として考えられるが、煩雑な日常業務の中で自らの実践を語ることの少ない教員や保育者にとって語りの場をもつことの意義が示されたのではないだろうか。

引用文献

厚生労働省（2008）保育所保育指針

文部科学省（2008）幼稚園教育要領小学校学習指導要領

佐藤智恵（2011）自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析－「語られなかった」保育を枠組みとして－保育学研究49(1). 40-51.

塩原依里奈（2010）幼・小連携に関する一考察：人事交流経験者へのインタビューと授業実践の参与観察から．研究紀要／金沢大学人間社会学域学校教育学類附属幼稚園、56.131-136.

高濱裕子（2001）保育者としての成長プロセス．風間書房．17-18

寺﨑恵子（2010）初年次における教育の課題：１年生になることの意味を考える．聖学院大学論叢、23(1)、87-101.

東京都教育委員会（2010）平成21年「東京都公立小・中学校における第１学年の児童・生徒の学校生活への適応状況にかかわる実態調査」http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr091112/pr091112_s.htm （2011/12/09）

山田有希子・大伴潔（2010）保幼・小接続機における実態と支援のあり方に関する検討－保幼５歳児担任・小１年生担任・保護者の意識からとらえる－．東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ．61、97-108.

注）文部科学省平成16年「教員異動調査」の中の「離職の年齢区分別離職教員数」では、全国の離職した幼稚園教諭のうち、25歳未満のものが占める割合が全体の33.6％であったことが報告されている。